

清水遺跡 (2)

遺跡番号 平成11年度登録
調査回数 第1次
所在地 村山市大字名取字清水北
北緯・東経 38度31分7秒・140度22分23秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業 東北中央自動車道(東根～尾花沢)建設
調査面積 4,900㎡
現地調査 平成22年5月18日～11月30日
調査担当者 齋藤健(現場責任者)・中里秀樹・江波大・伊藤純子・山田めぐみ
調査協力 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山市教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別 集落跡
時代 平安時代
遺構 掘立柱建物跡・竪穴住居跡・溝跡・土坑・ピット
遺物 土師器・須恵器・金属器 (文化財認定箱数:33箱)



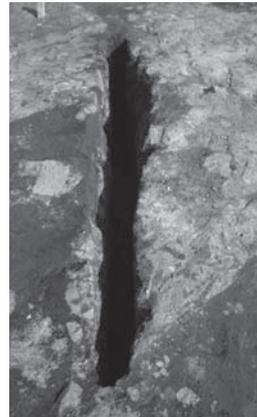
遺跡位置図(1:25,000)

調査の概要

清水遺跡は、村山盆地北部にある村山市のほぼ中央に位置し、最上川が大きく蛇行する右岸部にある丘陵の東斜面に立地する。

今回の調査は、東北中央自動車道(東根～尾花沢)建設工事に伴って行なわれたもので、遺跡範囲が広いため南端の調査を「清水遺跡(1)」、北端の調査を「清水遺跡(2)」の二つに分けて調査した。

今年度は、5月からトレンチを設置して確認調査を実施した。その結果を受けて、遺構及び遺物の分布が確認



SD1007 おとし穴(東から)



SD1009 おとし穴(東から)

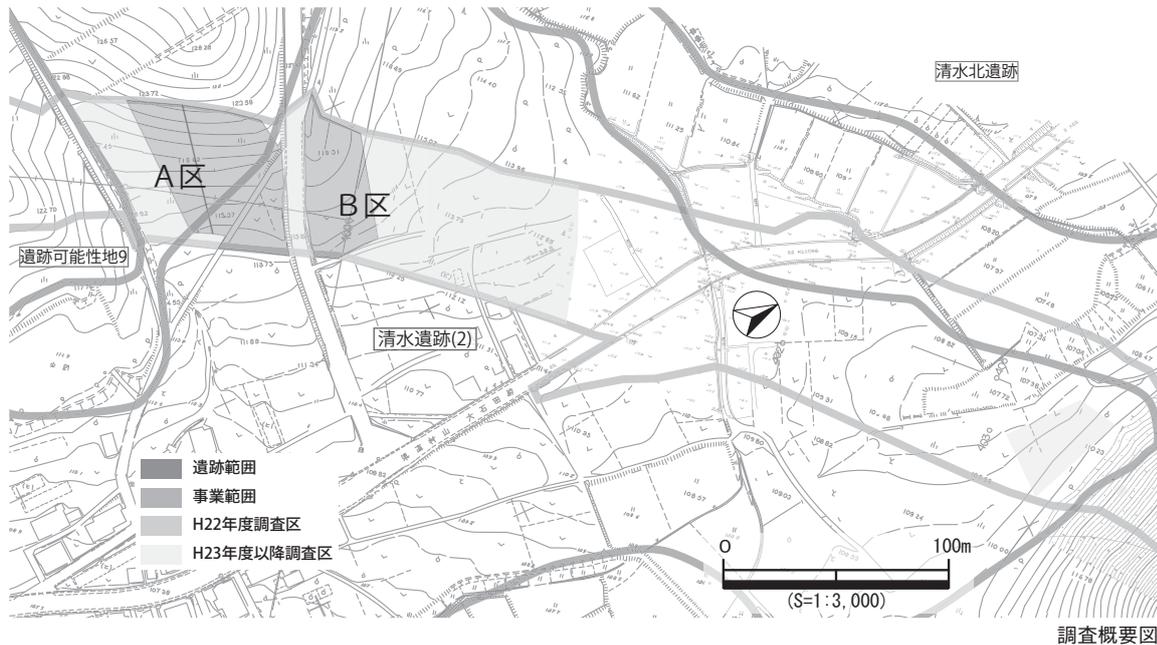
できた範囲から、約4,900㎡についてのみ発掘調査を実施した。

遺構と遺物

今年度調査区を南からA区、B区とした。

A区は丘陵の斜面である。丘陵の裾野部分には、いわゆる黒ボク土の層が広がっているため、遺構検出は困難を極めた。

検出された主な遺構は、竪穴住居跡24棟・掘立柱建物跡3棟・土坑など、主に平安時代のもつと見られる遺物が出土した。



これらの遺構の覆土には、西暦915年に噴火したとされる十和田aとみられる灰白色火山灰が確認されたものもあった。

B区は、現状では緩斜面であるが、丘陵の斜面に大幅な造成を行って畑地として利用していたものである。そのため、削平・攪乱が激しく、遺構の残存状況があまり良くなかった。主な検出遺構は、縄文時代のものと考えられる長さ4m、幅0.3m、深さ1mほどのおとし穴が4基、平安時代の竪穴住居跡1軒と竪穴住居跡の炉跡とみられる焼土遺構が1か所である。

多くの竪穴住居跡には、南壁に円形のカマドが付属している。大きさは一辺4mあまりから10mを超える大形のものまであった。A区斜面上では5軒が重複しており、短期間での建て替えの可能性も考えられる。他に同じ地点にここまで重複して建てられたものは無いので、何らかの特別な理由があって、同じ地点に建て替えを行ったとみられる。また、斜面に造成されたST100、101竪穴住居跡には、張り出しが設けられていた。ST137竪穴住居跡は焼失住居で、焼けた建材と共に土器が出土した。

これらの住居跡の内部からは、主に須恵器の坏や土師器の坏・甕などが出土している。また、ST5竪穴住居跡からは^{とうす}刀子が出土した。いずれも土器の形態から、平安時代の9世紀代に使用されていたと見られる。

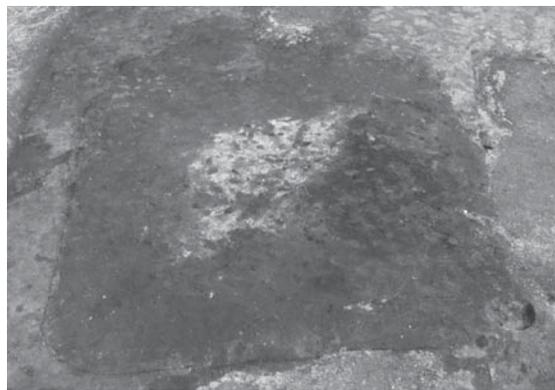
掘立柱建物跡は3棟あり、柱間が2間×3間のものと2間×2間のものがある。いずれも竪穴住居跡と向きを合わせているので、同時期の建物とみられる。

まとめ

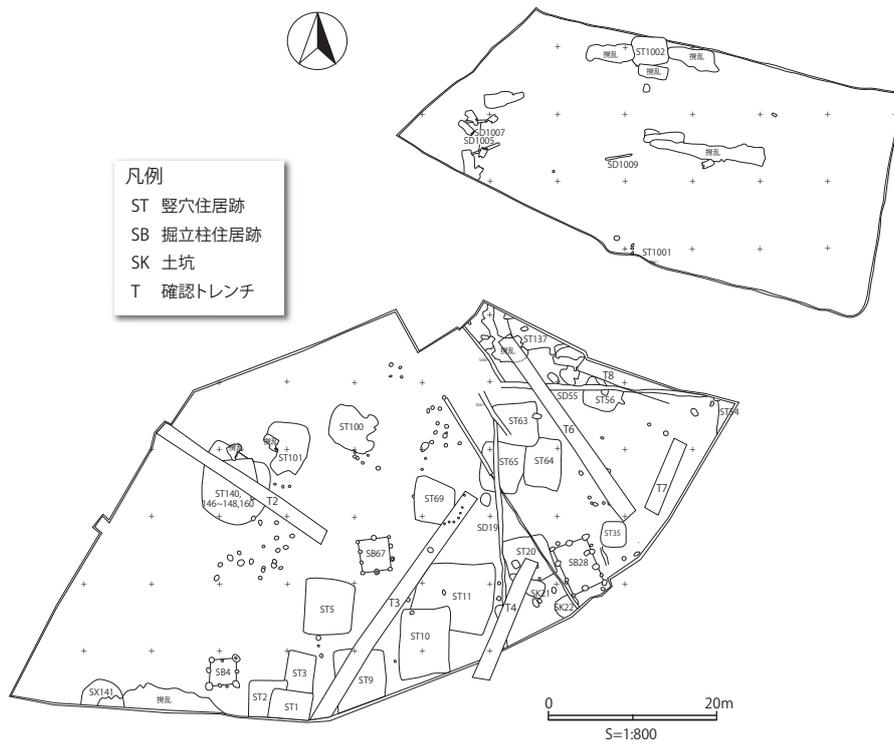
今回の発掘調査の結果、清水遺跡(2)は、水はけのよい丘陵の斜面地に竪穴住居が並ぶ集落であることが判明した。斜面の標高が高いところには、大形の竪穴住居跡が4回建て替えられている。さらに、張り出しを持つ特徴的な竪穴住居跡も見られた。

火山灰の堆積している様子や、出土した土器の特徴から、集落は9世紀後半から10世紀初頭頃に廃絶したと考えられる。

調査は来年度以降も継続する予定で、さらに詳しい成果が上がることを期待される。



ST1002 竪穴住居跡灰白火山灰検出状況(西から)



遺構配置図



ST63 竪穴住居跡完掘状況 (北から)



ST101 竪穴住居跡完掘状況 (北から)



竪穴住居跡 ST137 完掘状況 (南から)



ST137 竪穴住居跡遺物出土状況 (北から)



斜面を造成した ST5 竪穴住居跡完掘状況 (北から)



竪穴住居跡 ST5 出土刀子 (北から)



竪穴住居跡 ST56 内カマド完掘状況 (北東から)



掘立柱建物跡 SB67 完掘状況 (北から)



A区全景 (北東から)